

# 校長室便り

(文責)

ドーハ  
日本人学校校長  
酢谷昌義

日に日に上達する1・2年生

## 1人でもできる力を!

今週の金曜日はいよいよ学習発表会です。本番の発表を通して、誰もが満足感・達成感を得ることができるように、「1人でもできる力をつけること」の大切さについて全校集会で話しました。

子ども達はいくつもの発表練習に、それぞれ頑張っており、それぞれ取り組んでいますが、その中で音楽発表の場面を取り上げました。全校で一緒に歌うときは本当に元気の良い、聞いていても楽しくなる歌声が響きます。しかし少人数になると、それと同じだけの元気をまだ出せていないのではないかと思います。そこで周りの人に頼るのではなく、自分一人でもしっかりと歌える・演奏できるように頑張りたいと呼びかけました。

それは他の発表でも同じです。誰かに頼るのではなく、子ども達1人1人が「自分1人でも大丈夫!」というところまで自分を高めることができれば、どの発表も素晴らしいものができると思います。



「コーラルスピーキング」の練習

こうなれば、その力はもう見せかけではなく「本物」です。反対に本物に見えていて、実はまだ見せかけだったということも良くあります。

本物なのかまだ見せかけなのかを見分ける方法の1つが、「1人でもできるか」という物差しです。誰かと一緒なら・集団の中でなら大丈夫というのは、周囲の状況によって力が出せたり出せなかったりと不安定です。集団が大きくなるとその不安定な状態でも、集団の力としては何となく良く見えることが多分にあります。しかしその中では、場合によっては多くの子どもが本物の力を身につけずに終わってしまうことさえあります。

ドーハ日本人学校は小規模少人数学校です。だから子ども達1人1人が、みんなとても大切な役割を受け持っています。誰か1人が欠けても大変です。自ずと1人でも頑張らねばならない場面も多くなります。でもそれは全て、子ども達が本物の力を身につけ



ビデオで自分たちの発表の振り返り

るための、絶好のチャンスになっているのではないかと思います。

改まった場で人の前に立つと、誰でも緊張してしまいます。性格的に緊張しやすい子どももだっています。そこで自分の役割がきちんと果たせるようになれば、それは本当に素晴らしく、同時に「本物の力」をつけたと言えるのではないかと思います。



休み時間はいつもにぎやか

### スクールバスについて

先週はスクールバスの配車について、1部変更して走らせてみました。その結果、変更した方が4台ともスムーズで運行時間に差ができませんでした。

そこで変更したものを、今後の配車計画にしたいと思います。

最新版を本日配布いたしましたので、それぞれご確認ください。

ご面倒をおかけしますが、よろしくお願ひいたします。

# 校長室便り

(文責)

ドーハ  
日本人学校校長  
酢谷昌義

「無言清掃」を心がけています

と思います。少人数で周りの人との繋がりが自然と深くなるこのときに、人のために働き、それを喜んでくれたり誉めてもらったりすることを通して、本当の優しさや思いやりというものを身につけてくれればと思います。

個人の権利というものは、受けると同時に誰かに『serve (尽くす・与える)』ことだという当然のことを、私達指導者や大人は子ども達に教えていかなければならないのではないかと思います。

## 『花壇の花』は…

花壇に新しく花を植え、ちょうど1週間たちました。植えたばかりのときと比べると、ずいぶん緑が濃く元気になってきました。花の色も鮮やかです。しっかりと根を張ってくれたのだと思うと、やはり嬉しくなります。

花一杯にして学習発表会を迎えるところまではいきませんが、このまま元気良く育てほしいと思います。



きれいな花をつけています

## 人のために働くこと…

昨日は「1人でもできる力」の大切さについて考えました。そういう力をつけた人は周りからも頼りにされるようになります。それはいろいろな場面で見られます。また自分が頼りにされているということが分かると、ますますしっかりしてくるとい、良い方向に歯車が回っていきます。こういう事実をいくつも目にしていると、立場が人をつくるということが、子どもの世界でも言えるのではないかと思います。

人間が本当に人間らしくなるためには、利害を離れて、人のために働くことができる存在にならなければならないと言われます。言葉が適当ではありませんが、言い換えると「損になることでもできる人」でなければならないということです。しかしそれは不思議な見返りを持っていると思います。人の役に立つということは、金銭的・時間的・労力的な面で計算すれば、損をすることになるのかもしれ

ません。ところが精神的には、それを補って余りある充足感・満足感が残るのが普通です。

だから子どもは幼いうちから、できるだけ早く人の役に立てる子であるように訓練し、それを誉めてやらなければならないと思います。誉められることによって、また次の人の役に立つ行動へとつながっていくからです。

しかし現実には、なかなかそう簡単にはいきません。子ども達を取り巻く大人の世界が、自分の要求だけを無限に主張し、またそれが当然の権利であるような雰囲気にあふれています。人のために働けなどと強制されようものなら、それは個人の自由の侵害ということになってしまいます。その結果、世間には人のためには何もしない、利己主義的な人があふれているような状況になったのではないかと考えてしまうこの頃です。

ドーハ日本人学校の子子ども達は、みんな素直で優しく素晴らしい可能性を秘めている



毎週月曜日は全校清掃の日



2つのホールを中心に行います

# 校長室便り

(文責)

ドーハ  
日本人学校校長  
酢谷昌義

「ドッジボール」に盛り上がります

## 旧ドーハ日本人学校を訪ねて

昨日3・4年生と一緒に、旧ドーハ日本人学校を訪ねてきました。2001年の7月に閉鎖されるまで使用されていた校舎の跡を見に行っただけです。ドーハ日本人学校を紹介する番組作りを3・4年生がしており、学習発表会でもいろいろ取材したことを発表してくれることになっています。その取材の一環として、以前の学校があったところを実際に見てみたいということを出かけてきました。

民家を二棟借りていましたので、どちらも今は人が住んでおられて、残念ながら内部を見ることはできませんでした。また二棟の校舎の間には、30m四方の芝を張った校庭がありましたが、ここも塀で覆われていたため中をうかがうことはできませんでした。

校舎として利用していた場所を外から眺め、当時の様子をいろいろと説明するだけになってしまいましたが、私には当時のことが昨日のこのように思い出されました。

その頃の子ども達は、非常に窮屈でストレスのたまりやすい学校生活の中で頑張っていたということを改めて考えていました。自由に遊ぶことができなかつた点が、何よりもストレスになっていたのではないかと思います。現在の校舎のように運動スペースがあるわけではなく、校庭も夏場は使えません。今の講堂の半分ほどの部屋が最も大きな部屋で、そこで遊びや発表会・儀式も行っていました。

その狭い部屋で中休みや昼休みに何をして遊んでいたのかというと、「転がしドッジボール」を毎日のようにしていたのです。しかも小学部1年生から中学部3年生までが一緒になって。ボールを思い切り投げることも、走り回ることもできなかった毎日は、子ども達にとって本当につらかったらうと思います。特に高学年・中学生にとっては、大変なストレスだったに違いありません。

そこで週3時間の体育は、

全て水泳授業を行っていました。クラブハウスのプールが使えたので、唯一の運動の機会として貴重な水泳授業の時間でした。

当時も砂丘マラソンを実施しており、冬場はその練習をかねて、毎日のようにコンパウンドの中を走っていました。水泳でもマラソンでも、この国の滞在年数が長い子どもほど持久力が乏しく、子ども達の健全な成長を考えたときに、体力・運動能力の問題はとても大きな課題でした。

このような環境条件は、上を見ても下を見てもきりがありません。条件さえ整えば、放っておいても良くなっていくものでもありません。大切なのは、与えられた条件の中でより良い教育をいかに行っていくかということです。

大変な環境の中で、当時の子ども達はそれなりに楽しく過ごしていました。そうするための創意工夫が、何よりも求められることなのだと私自身考えさせられました。



JBKコンパウンドの入り口



校舎だった場所でクラス写真



水泳のたびに通ったクラブハウス



# 校長室便り

(文責)

ドーハ  
日本人学校

校長  
酢谷昌義



中学部の発表練習

## 1年の締めくくりを...

今日から12月。改めて月日の過ぎていく早さを感じています。学校は今、学習発表会に向けてみんなが一丸となり気持ちを高めているところです。発表会が終わると同時に、第2学期のまとめはもちろん、この1年のまとめや振り返りをする大切な時期になります。中学部は期末テストを控えています。受験を目の前にしている生徒もいます。それぞれが自分のなすべきことに向かって、しっかりと取り組んでほしいと思います。

12月は1年の締めくくりをする大切な月だと思うのですが、季節感も余り感じられないこの国にいと、日本とは違い年末年始の意識が薄く、普段と変わらず何となく過ごしてしまうようなところが私にはあります。だからこそ、きちんとけじめをつけていきたいとも思います。

年が明けると、学校でも「新年の抱負」や「決意」の発表をしています。しかしこの時期になると、自分がこの

1年何を志してきたのかを覚えていて人の方が珍しいのが、おおかたの実態ではないでしょうか。それでも年が改まることによって、新たに自分の目標を定めるということを繰り返しているわけですが、それはそれでとても意味のあることだと思っています。

私は担任をしているときに、よく「竹の節」の話を子ども達にしていました。節があるから竹は強くしなやかなのだということ。

節目節目を大切にすることは、人間の成長にとってやはり重要なことではないでしょうか。学習発表会に全力を注ぐことも、1つの節目だと思います。何を節目と考えるかは人それぞれでしょうが、この12月という月は、いろいろな意味で大切な節目の月には違いないと思います。

今日からは、今まで以上に1日1日を大切に、1年の締めくくりをしっかりとしていきたいと思います。

十二月の詩

○小学部低学年

「おちば」

与田準一(よたじゅんいち)

おちば おちば、

きの はっぱ。

やまの こぎるが、

ひろったら、

おもちゃの おかねに

するかしら。

ならの き、かしの き、

きの はっぱ。

もりの こりすが、

ひろったら、

でんしゃの きつぷに

するかしら

おちば、おちば、

はっぱっぱ。

○小学部中学年

「冬の花」

阪田 寛夫

さわってみたい 冬の花

かれた野原の 白い星

さわればきつと つめたくて

こころもしろく ひかるでしょう

さわってみたい 冬の花

ゆびをしずかに 近づける

さわればきつと 花びらは

小さいなみだ こぼすでしょう

さわってみたい 冬の花

けれどなぜだか さわれない

そのままそっと 立ち上がり

はしつてかえる かれ野原



3・4年生の発表練習